

戦時中のことですが、私が小学校3年生の時に目の病気に罹り、失明してしまうかもしれないと言われて赤十字病院に入院することとなりました。当時、赤十字病院は山の方にありました。治療で目の白く濁った部分を焼いていたのだと思いますが、目の前で火花が飛ぶのを覚えています。入院生活では、目が見えなくなってしまうかもしれないという恐怖でいっぱいでしたが、お医者様と看護婦さんには大変優しくしていただきました。お陰で失明することなく退院することができ、今もこの目で見るができることに心から感謝しています。

また、退院する直前には、お世話になった看護婦さんが病室に来られ、「戦地に赴きます」とお別れの言葉を述べられました。その時には目も随分と回復し、目を覆っていた眼帯を少し上にずらして覗き見ると、紺色の制服を着た看護婦さんの姿が見えました。その時の看護婦さんの凛々しい姿は、今でも忘れることができません。

今は亡き主人とも、「赤十字には助けてもらった」といつも話をしておりましたので、赤十字に財産の一部を寄付することは早くから決めておりましたが、寄付する時期はまだはっきりと決めてはいませんでした。

しかしながら、新型コロナの感染が拡大する中で、自らの感染の危険も顧みず、献身的に患者さんの治療にあたっておられるお医者さんや看護師さん等の報道を目にし、赤十字活動や医療従事者の皆さんのお役に立てていただきたいとの想いでこのたび寄付させていただきました。

(神戸市 K・K)